

旧大和川水系のムラを歩こう

《 行 程 (全行程約7km) 》

近鉄けいはんな線吉田駅→中甚兵衛顕彰碑→諏訪神社→吉原地蔵尊→長者橋・藤五郎樋→古箕輪八幡神社→栗原神社→おかげ灯籠(河内街道)→宇波神社→清水地蔵尊→竹永稻荷神社→産土神社→鴻池新田会所・朝日社→JR学研都市線、鴻池新田駅

①中甚兵衛顕彰碑

この顕彰碑は、大正4年に中甚兵衛の大和川付け替え工事に対する功勞に対し従五位が贈られたのを記念して、生地の旧今米春日神社跡に建立されたもの。

大和川付け替え工事は、宝永元年(1704)に行われており、大和川を石川の合流点から大阪湾まで真っ直ぐ西へ付け替えられた。

大和川が付け替えられたのは、大きくは、当時の河内、特にこの辺りの地形の特徴によっている。今から6000年前、縄文海進といって地球が温くなり海面が高くなっていた。そのころの河内平野は「河内湾」と呼ばれる海が広がってあった。その後、海面の低下や北の淀川、南の大和川より運ばれてきた土砂によって河内湾がやがて「河内潟」とよばれる干潟が河内湾縁辺に発達した。さらに今から2000年前には「河内湖」となり深野池、新開池と呼ばれた沼沢地は河内湖の名残としてあった。付け替え以前の大和川は大和盆地の水を集めて生駒山脈を横断し、柏原に出て石川と合流して河内平野を南東から北西に五本の指を広げたように水系を広げ大阪城の北で淀川に合流して大阪湾に注いでいた。そのような低地にあった河内は歴史を遡ってみても幾度となく洪水が襲っていたことが記されている。

特に寛文6年(1666)から延宝2年(1674)にかけての洪水によって玉櫛川、吉田川、菱江川、深野池、新開池の堤防の30箇所も決壊し大きな被害をもたらした。完全に天井川化した。

以来、大和川流域の人たちは大雨のたびに大規模な洪水に苦しみ、江戸幕府に治水工事を願い出た。今米村の庄屋であった中甚兵衛さんもその中の一人で、「大和川の川違え」に大きな役割を果たした。明暦3年(1657)、甚兵衛が19歳の時、父九兵衛が他界したあと、父の遺志を受け継ぎ、大和川の付け替えを幕府に請願し続けた。幕府はこの請願には消極的であり河内平野の開拓と治水という中甚兵衛の考えが莫大な費用が必要ということもあって認めようとはしなかった。

しかし、再三請願する中で、大坂東町奉行所の代官、万年長十郎の進言もあって元禄16年(1703)、ついに幕府は大和川付替の命を下した。時に甚兵衛65歳。50年かけた悲願が実を結んだ。

大和川の付け替え工事によって1060町(1町=約1ha)が開発されることとなり、幕府は地代金をとって新田開発と耕作の権利を与えた。川中新田、深野新田、鴻池新田などが開拓・開発され河内木綿の栽培も盛んになり河内は豊かな土地となった。以後、大雨の度に洪水にを恐れていた旧大和川流域の人々は、少しは安心して暮らすことが出来たようだ。しかし、新川流域の人々にとって、この付け替えは如何なものであったのだろうか。

大和川の付け替えは、治水対策という従来考えられてきた側面と経済成長、幕府の財政安定優先の「新田開発」促進という側面があったといえる。

《問題1》

洪水関係年表(江戸時代以降)

年	西暦	できごと
元和6	(1620)	大和、河内諸国、洪水、柏原の堤防決壊
寛永10	(1633)	摂津諸国洪水、柏原村、舟橋村の堤防決壊
寛永12	(1635)	大和川洪水、舟橋、柏原、弓削村の堤防決壊
寛永15	(1638)	吉田川の堤防決壊
慶安3	(1650)	九州・近畿・東海道諸国、大雨、洪水、久宝寺川、八尾木の堤防決壊
承応元	(1652)	大坂、大雨、洪水、吉田川堤防決壊
延宝2	(1674)	玉櫛川、菱江川、吉田川、深野池、新開地堤防35ヶ所決壊
延宝3	(1675)	玉櫛川、菱江川、吉田川、深野池、新開地堤防19ヶ所決壊
延宝4	(1676)	玉櫛川、菱江川、吉田川、深野池、新開地堤防10ヶ所決壊
天和3	(1683)	玉櫛川、菱江川、吉田川堤防7ヶ所決壊
貞亨3	(1686)	久宝寺川、玉櫛川、菱江川、恩智川堤防4ヶ所決壊
宝永元	(1704)	大和川付け替え工事
中	好幸著(1992)	「大和川の付替—改流ノート」より抜粋

「延宝2年（1674）から天和3年（1683）にかけて大洪水が発生していますが、人災ではないかと言われています、なぜでしょうか。」

②諏訪連と諏訪神社

諏訪神社は、古文書「氏神三社興立記」によると、享禄5年（天文元年1532）、信濃国諏原之庄の住人である諏訪連（すわのむらじ）の子孫がこの地に村を開き、本村守護のため諏訪大明神（建御名方神（大国主神の子、たけみなかたのかみ）・稻荷大明神・筑波大権現の三社を勧請したのが、創始であろうと伝えられている。

現在の諏訪神社は、その中の諏訪大明神を祀る一社だけが残されている。本殿は、一間社流造り柿（こけら）葺で、その規模にくらべて、江戸時代初頭に修理されているが、全体として、室町時代の古材がよく残されており、柱や梁などの部材が太いこと、また、当時の彩色が残っていることなど、室町時代末期の神社建築様式の特徴を残している。また、市域最古の神社建築として重要で、市の文化財に指定されている。

なお、諏訪大明神は、「南宮大明神」とも呼ばれ、日本第一の「軍神」であり、「水の神」であり、鎌倉時代には日本第一の「風神」とされ、勇猛な神であり、開拓神であり、古くは狩猟農耕の神、今は産業・交通安全・縁結びの神として信仰されている。

境内には「村人よ たとえ枝葉に別るとも 二度 根にかえりて ここに 会む」と書かれた石碑がある。

③古箕輪八幡宮－拝殿に明彩な絵馬

六郷井路（水路）の側に立つ古箕輪八幡宮は、創建年代は不明。しかし、本殿は一間社流造柿葺で江戸時代中期の建築とみられ、鳥居に寛保元年（1741）、拝殿前の灯籠に明和元年（1764）の銘があることから古箕輪八幡宮は新田開発以後に整備されたものと考えられる。

また、鳥居横には天保2年（1831）銘のある「おかげ灯籠」がある。

古箕輪八幡宮で特筆すべき事は、拝殿に6枚の図柄がはっきりとした鮮やかな大絵馬が残されていること。元寇の戦い、神功皇后朝鮮出兵図、江戸時代の風俗図、天皇に将軍・御三家が供をした加茂明神参詣図、大江山の鬼神退治図などだが、いずれも幕末から明治にかけて奉納されたもののようだ。



④藤五郎樋

新開池に面していた古箕輪は水に縁のあるところ。古くは漁村として、大和川付け替え後は農村として暮らしてきた。池新田が開発されて後、農業を主に営むようになった、しかし、悪水や干害に苦しんだようだ。古箕輪八幡宮の東側にある長者橋の横に、各村からの井路が立体交差する高度な用水分岐の水門（藤五郎樋）が今も残っている。

⑤吉原地蔵尊

吉原地蔵石仏は、『西光寺』というお寺の門脇にある、地蔵堂の中にあります。吉原地蔵石仏については、「昔近くの川底から引きあげられた」という、言い伝えがあるそうですが、定かではないようです。花崗岩の自然石に舟形光背を付け、蓮華座の上に立って、右手に錫杖、左手に宝珠を持つ地蔵立像を厚肉彫りしたもの。市内で最も大きい石仏（総高2m、像高1.7m）で、河内地方でも一番ではないかといわれている。このような石仏は、鎌倉時代の元徳2年（1330）の銘のある、阿弥陀如来像を刻んだ磨崖仏（奈良市田原）が知られている。この地蔵石仏には銘がないが、この石仏も室町時代初期の石造彫刻と考えられ、大阪府の有形重要文化財に指定されている。

地蔵堂の前には、寛延3年（1750）の銘のある地蔵常夜燈と安政5年（1858年）の銘のある線香立ての基壇部分が残されている。

《問題2》 「吉原ではお正月に雑煮でなくて『ぜんざい』でお祝いをする習慣があるようですが、どうしてでしょうか」

⑥栗原神社

栗原神社はもと梶原宮の称されて地域の氏神として崇敬されてきた。祭神は中臣雷大臣命でこの地は古くは中臣系栗原連、栗原勝（天兒屋根命11世孫、雷大臣之後）が居住していた歴史の古い地でもある。

河内では江戸時代の中頃から稲刈りが終わった頃、伊勢の太神楽の影響を受けて地域ごとに獅子舞があり、秋祭りや、正月には神社に奉納し町内を練り歩き、各家々に門付けをして家内安全や五穀豊穡を願ってきた。

ここ吉原地区では、今から23年前、平成4年に町内のコミュニケーションをさらに深めようと、郷土芸能「獅子舞」の復活を地車保存会「昭和の会」の皆さんからの発案があり、自治会など地域の人々の協力で、見事「獅子舞」を復活させた。吉原の獅子舞には、災難を除く「荒神払い」「角切りの舞」、五穀豊穡を祈願する「御幣踊り」「なまずの踊り」があり、伝統を受け継いでいる。

隣接する加納、川田の両地区にも伝統芸能「獅子舞」は現存している。

⑦河内街道、おかげ灯籠

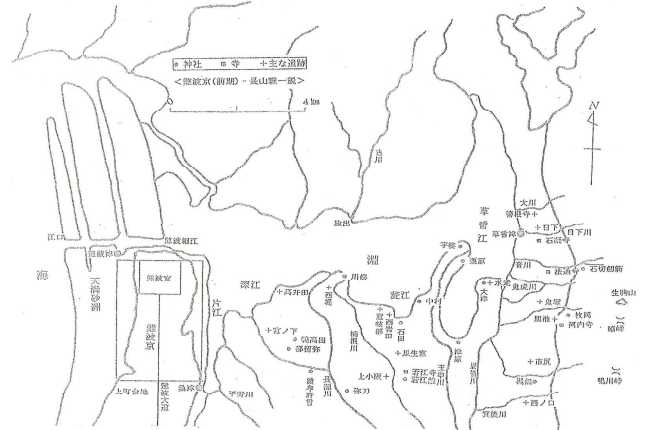
おかげ灯籠は、江戸時代に盛んに行われた伊勢神宮参宮の記念物でほぼ60年毎に遷宮が行われる年の参宮は『おかげ年』といわれ平年より一層の御利益があると言われていたことから慶安3年（1650年）、宝永2年（1705）、享保3年（1718）、享保8年（1723）、明和3年（1771）、文政13年（1830）と計6回にわたり各地で集団でのおかげ参りが行われた。

文政13年庚寅の年号のある加納の灯籠は、おかげ参りに参加した加納の人たちが、記念として常夜灯として立てたもの。

《問題3》 「おかげ灯籠は夜道を照らすために建てられたものでしょうか」

⑧宇波神社

宇波神社は字瓦口にあり、「延喜式神名帳」にのせられている古社で、祭神は、孝元天皇の后で河内青玉繫（かけ）の娘、植安媛命（はにやすひめのみこと・土の神様）で、別名熊野と称されている。社名の起源も含め、古代より中世には、加納の地が周辺の湖沼地帯にはり出し、いち早く漁業、農業、水上交通の要所として繁栄してきた。現在は水分神社（みくまり）と吉野神社を合祀している。



第2図 8世紀ごろの大和中部想定図（日下雅義氏図一註12を基に作成）

⑨清水地蔵尊

加納の清水地蔵は、花崗岩の舟形石に半肉彫りされた高さ84cmの立像で、彫りに粗雑さがみられ力強さもないところから、江戸時代初期の作かと思われる。昔から低湿地帯であった加納の守り神として村境に祀られていたが、度重なる洪水のため、いつの間にか川底深く埋まってしまった。江戸時代に村人が川浚えをして、この地蔵菩薩を掘りおこし地蔵堂を建てあらためて祀った。このような地蔵菩薩は加納の人たちに「堤所の地蔵さん」の名で親しまれ続けてきた。

毎年、加納に人たちは、8月24日の地蔵盆になると五穀豊穡と村人の無事安泰に感謝して、米、麦などの五穀を素材にした、干支や「豊作」の文字を細長い板の面に貼り付けて表現する一対の飾り物を供えていた。それは手の込んだ細かい細工で配色もよく見事なものだった。

⑩鴻池新田会所（国史跡・重要文化財）

《地名、「鴻池新田」の由来》

宝永元年（1704）の大和川の付け替え工事により「新開池」あたりに造られた新田は178町歩（170ヘクタール）に及び、翌年には121戸757名が移住している。この工事を請け負ったのが大阪の豪商、鴻池善右衛門宗利で地名は、開発者の鴻池新田と名付けられた。もともと鴻池家は、戦国時代の武将、山中鹿之助幸盛の子ども、新六幸元が摂州河辺郡鴻池村（今の伊丹市鴻池）に移住し、武士を捨て酒造りを生業としたことに始まり、屋号を村の名前「鴻池」にした。軟水を使った酒であったが当時困難であった濁り酒を清酒にすることに成功した。鴻池の清酒は評判良く、江戸で沢山売れた。当時は大坂が上方。江戸は下ることになる。「下らないもの」という言葉があるが、鴻池の酒は江戸に下ってもどんどん下っていき、はじめは馬の背に酒樽を載せて運んでいたが、あまりに大量に売れたので、船で運ぶようになったという。

斯くして鴻池家の海運業が始まった。莫大な資産を蓄えた初代、鴻池善右衛門正成は天王寺屋五兵衛に学んだ両替商などを営み豪商となった。本市鴻池の地名は伊丹市鴻池に由来している。なお、6代目善右衛門幸行の時、「大切な米を酒にするのはもったいない」ということで、酒造業を廃業している。

《鴻池新田会所》

鴻池新田の管理事務所として、宝永4年（1707）に完成した。開設されて308年になる。大和川付け替え工事後、時の大富豪鴻池家により新田開発・管理・運営のため建てられた会所は、当時の建築物がほぼそのまま現存しており、貴重な文化遺産であるため昭和51年（1976）に国の史跡に指定され、また、昭和55年（1980）に本屋、米蔵、文書蔵、本屋に付属する屋敷蔵など5棟の建物と棟札が重要文化財に指定されている。

本屋の広大な土間と高い梁、開放的で簡素な座敷、中庭に面して建ち並ぶ米蔵、道具蔵、米搗き場など民家建築とは大きく異なり、新田経営の中で生み出された造作が特徴だが、文書蔵が他の米蔵などに比べ床が高く、鴻池善右衛門宗利が証文、文書を大切にしていたことが分かる。会所の役割として年貢米の徴集、争いごとの調停などであるが、会所内に年貢米を納める米蔵はあるが「綿蔵」はない。

《問題4》「綿作農家は年貢をどのようにして納めていたのでしょうか。」

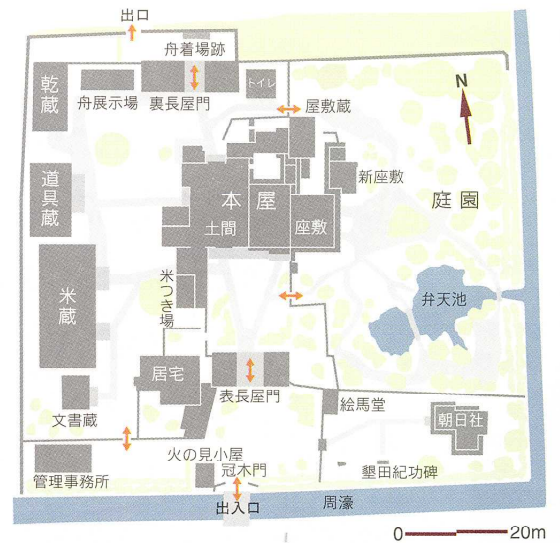
《朝日社》

新田開発が始まった宝永2年（1705）、天照大神を新田の氏神として勧請したことが起こりで、神明宮・神明社と呼ばれた。なお、この年はおかげ参りが発生した年であった。

また、幕末までに新田開発の3代目善右衛門宗利が神として祀られ、この境内に開祖社が創建された。明治になり合祀され新庄と三島の氏神と合わせて産土神社と称された時期もあったが、産土神社が成和小学校向かいに遷座した後、再び神明社と呼ばれた。朝日社の呼称は先代鴻池当主によるものと聞いている。

新田会所を構成するものとして、本屋、米蔵そして、氏神を祀る神社の三点セットだが、朝日社は現在、鴻池家によって祀られている。朝日社の特長として、秋祭り（9月16日）だけでなく4月16日に春祭りが行われている。この日は、開発記念日とも呼ばれている。農耕儀礼として祀るのでなく新田開発者、開祖神（宗利）を祀ることになる。神事を執り行うことで、地域共同体としての意識と結束を強め、相互信頼を深めることに繋がったことと思う。なお、朝日社は新田開発300年周年の2004年に改修されている。

《問題5》「鴻池家が祭神として『天照大神』を勧請されたのはどうしてでしょうか。」



朝日社境内の主な石造物

壱田紀功碑 永仁四年の西院灯籠 謡曲「井筒」業平の井筒